

## 「言の葉一つ二つ」

最近、(ウイグルに続き)南モンゴルの中国による人権蹂躪や文化・言葉の喪失が問われている。外語大OBとしては、言葉の専門学校の一つとして、失われていく言葉に対し何か出来ることはないのかと自問の日々だ。

例えば世の中にある外語大の連合組織が、言葉の専門集団の立場から隣国に対し何か言うすべはないものだろうか。

世界に冠たるテムジンの文化、言葉がなくなることなどあってはならないことだろう。

いま人新世が世に言われる。人類(ホモ・サピエンス)が登場して、地球の自然や生き物と同胞を滅ぼしながら現在まで来ている、仕方がないのかと思いつつ、改めて失われた(失われつつある)言語の数を見せられ愕然とする。

アメリカ191言語、ブラジル190言語、オーストラリア108言語、メキシコ143言語そして中国144言語。

如何にヒト族が同胞の部族、言語、文化を破壊してきたのか一目瞭然だ。

自分は英米語学科なので、少し米国史を勉強したが。アメリカの歴史はまさに戦争史である。アメリカの知性とJFKがいうジェファソン大統領は、最後まで白人と黒人の知力の差を疑わず、人種差別をアメリカに刻んでしまった。BLMにつながった。

ネイティブ・アメリカンをほぼ抹殺した白人たちは更に西海岸到達後もあきらめず太平洋へ進出。

白人男性とアメリカで変容したキリスト教中心社会がいかにアメリカファーストであるか、トランプの前からすでにある本能であった。

アメリカに浸った10年の滞在経験から自分を解放してみて改めて米国史を読み直すと残忍な戦争帝国アメリカが見える。10年間付き合った人の好み、そして敢然と悪に立ち向かう善良かつ自立したアメリカ人のイメージが消えていくのはさみしい。

アメリカに滞在したのは銀行時代の20代の3年間と54歳にして製造業(自動車部品ミズーリ工場)に勤務した6年であるが、その間の英語上達に触れる。

20代のアメリカでは、白人だけのカリフォルニア銀行に居た3年間で、当然うまくなると期待したが日本人も多い社会で学生時代のままでとても戦える英語にはならなかった。

50代半ばにして、単身で銀行から転職した自動車部品工場のアメリカ中西部ミズーリ州にある工場に6年、インド工場に2年勤務した、日本人一人の環境で、アメリカでは300人のスタッフとワーカー相手、インドでは法廷闘争だったのでインド人弁護士と監査会社相手に苦労しながら国際交渉の長い時代を経て漸く戦う英語に到達したと自己評価している。

この時代に如何に英語の世界が広いかを知った。中西部英語は標準に近いーシカゴあたり

が標準英語エリアであり、ヒラリークリントンの英語がそれにあたる。

機関銃のように話してくるアメリカ人英語はなかなか大変だったが、インド人英語は更に上に行く。言葉の達人というのはインド民族のことだと思うくらい多才で多様な言語王国を見た思いだ。

外語大時代は1969年入学の大学紛争の4年間。机に向かう時間は今の学生の半分もなかったかと思う。あの時もっと勉強できておればとも思うが、英語上達はやはり現場での戦いを通じて可能となる。

G7での菅首相のことが話題になっているが、日本人の英語下手は世界に知れ渡っている。これまで50年英語にどっぷりつかった身としては、やはり英語は面白いしやりがいがある。

子供や孫たちに英語の魅力とその英語を使った世界飛躍の醍醐味を伝える日が来るのを夢見ている。

投稿者：佐々木 洋 英語 1973年卒業

本投稿へのご意見、ご感想等はこちらまで